

【現代語訳】

桜の花が咲き、散る季節が来るたびに、「乳母が亡くなった季節だなあ」とばかりしみじみ物悲しく感じられるが、同じ季節にお亡くなりになられた侍従の大納言のお嬢さんの筆跡を見ながら、何となくしみじみと物悲しく感じられていたところ、五月ころ、夜が更けるまで物語を読んで起きてみると、やってきている方角もわからないが、猫がたいそう長く泣いているのを気が付いて見てみると、とてもかわいらしい猫であった。どこから来た猫であるかと見てみると、私の姉である人が、「しっ、静かに…人に知らせるな。とてもかわいらしい猫だよ。飼いましよう」と言うと、猫は、たいそう人に慣れていて、そばに寄ってきて伏せた。猫のことを探している人がいるだろうか、猫を隠して飼っていると、召使のあたりには全く寄り付かず、じつと私の前ばかりにいて、食べ物も汚らしいものにはそっぽを向いて顔を向けず、食べようとしない。姉妹の中にじつとまとわりついて、おもしろがってかわいがっている間に、姉が病気になることがあり、どことなく騒がしくなったので、この猫を北面（〓召使たちの部屋がある北側の部屋）だけにずっと置いて呼び寄せなかったので、やかましく泣き叫んでも、「やはりそういうものだろう（〓猫は放っておかれると騒がしく泣くもの）」と思っていたが、病の姉が目覚めて「猫はどこ？こっちに来て」と言うので「どうして？」と私が聞くと、「夢に、この猫がそばにやって来て『私は侍従の大納言の娘がこのようなようになったものである。こうなるべき前世からの縁が少しあって、この中の君（〓筆者）が、何となく物悲しいと（死んだ私を）思い出してくださいるので、少しの間だけここにいますが、最近召使たちの間にいて、たいそう寂しいことよ…』と言つても泣いている様子は、高貴で美しい人に見えて、目が覚めてみると、この猫の声であったことが、たいそうしみじみと感じられたのだよ…』とお語りなさっているのを聞くと、とてもしみじみと感じられる。その後はこの猫を召使たちの部屋にはやらす、大切に思い世話をした。